

近世出版の『百人一首』(その一)

湯 澤 賢之助

世に喧伝される古典は数多くあるが、その中で今日まで多くの人に愛誦されている作品となると、おそらく『小倉百人一首』を筆頭にあ

げねばなるまい。この『百人一首』は、成立以来、中世においてはたいせつに書写され、また詳しく注解され、近世になるや出版文化の興隆とともに、さらに多様の展開を見せたのである。あまりの多さゆえに、全出版の実態をとらえることはひじょうに困難であり、なかには書名しか伝わらず、残念ながらすでに散佚してしまったと思われるものも少なくはない。この近世出版の『百人一首』は、研究注釈としては、当時の学問的水準の高さを示しており、また、教養書としても有数の価値をもつものであった。さらに、他のジャンル、たとえば漢詩・俳諧・狂歌・川柳・都々逸・小説・演劇・絵画などへの応用を見るに至っては、当時の庶民の遊び心のすばらしさに目を見張るばかりである。

この近世出版の『百人一首』も、三〇〇年の間に当然政治の変化、時代の好尚とともに、著しい変化をとげている。本稿では、その変化

を辿ることにより、庶民意識の推移をとらえ、さらに出版文化の流れの一端をもとらえてみたいと思っている。

一 成立から中世の終りまで(概観)

藤原定家によって撰せられた『小倉百人一首』は、定家の子孫や門流が、とくに中世の歌道において中心的、指導的地位を占めたので、『三部抄』の一種としてたいせつに伝えられてきた。そのあらわれとして、二条派の歌人らによって多数書写され、名跡として今日まで高い評価を得ているものが多い。たとえば吉田幸一博士は、『百人一首』の名跡の流れ」(墨々特集『百人一首』第58号 一九八六 新年号)の中で、次のような作品を紹介しておられる。すなわち、

堯孝門弟周興律師の長享元年(二四八七)古写本をはじめとし、堯孝法師(一二三九一)・東常縁(一二四〇一)・猪苗代兼載(一二四七〇)・三条西実隆(一二四五五)・牡丹花肖柏(一二四三三)・足利義満(一二四八九)・烏丸光広(一二五七九)・後水尾天皇(一二五九六)・里村紹巴(一二五三七)・智仁親王

(一五七九)・本阿弥光悦(一五五八)らの筆跡である。

同書の「百人一首名跡の展望」にもあるように、名跡と称すべきものはこれらに限らず、とくに桃山時代から近世前期にかけて多くみられるようである。これは、長い戦乱の時代が終り、人々の文化的希求のもたらした所産であるといってもよいもので、こうした傾向は、町人の経済力の向上とともに、やがて庶民にもひろまっていたのである。

中世においては、すでに注釈書も出現している。その中でも、文明十年(二四八七)、および明心二年(二四九三)の奥書をもつ、一種の『百人一首宗祇抄』は、いずれも宗祇が東常縁から受けた講釈の聞書を、門弟に相伝したものといわれ、『百人一首』の注の先達とされるが、応永十三年(二四〇六)、藤原満基自筆の『百人一首抄』をもつ^①も古い注とするものもある。

そのほか、『百人一首古註(長享抄)』(長享元年へ一四八七)・『米澤本百人一首抄』(室町末期ごろ写)・『百人一首経厚抄』(享祿三年へ一五三〇)・『百人一首水無月抄』(室町末期写)・『百人一首美濃抄』(室町末期写)等があるが、これらの中で、近世初頭にもつとも注目され、広く読まれたのは細川幽齋の『百人一首抄』であった。幽齋はいうまでもなく、当時の大名であり、また歌人、歌学者として古今伝授を受け、二条家流の歌学の継承者、大成者であった人物である。その『幽齋聞書』に

行住座臥口に有へきは詠歌大躰、百人一首なり。是我歌よめらん時、吟しくらへて歌のことからをみんかためなり。(『細川幽齋聞書(和歌

受用集 卅五 代々集所見之心持の事)

とあるのをみても、幽齋がいかに定家を、また『百人一首』を尊重していたかがよくわかるといえよう。

その門弟も智仁親王をはじめ、中院通勝・烏丸光広・三条西実枝・松永貞徳ら、堂上から地下にまでわたっており、その影響の大きさはかりしれぬものがあつた。したがって、その著わすところの『百人一首抄』(幽齋抄)も大に行われ、近世の「書籍目録」類を検するに、その書名を頻繁に見出すことができる。

このように、定家によって『百人一首』が成立して以来、中世末期に至るまでを概観してみると、まず上流文化人がそれを書写し、注釈して鑑賞するという形で伝えられてきたことが明らかにわかる。これは、他の古典類の伝播と大差ないといえるだろう。ここに庶民が参加する姿は、まだ認められないのである。中世も末期になると、京都などでは土倉・酒屋などの経済力をもった人々が出現し、その力をもとに豪華な「風流踊り」が行われたり、「御伽草子」には経済力を基に出世していく庶民の姿(たとえば『文正草子』中の塩焼きの「文正」など)が描かれたりするようになるが、文学のような風流韻事に庶民が直接参加するようになるのには、まだ時間を必要とするのである。

こうした流れの中で、近世になると濫作されるといってもよい「異種百人一首」がすでに作られているのは注目してよい。それは、『新百人一首』(文明十五年へ一四八三) 常徳院(足利義尚)撰、『横川和尚百人一首』(成立年未詳 横川景三撰)、『武備百人一首』(天文二十年へ一

五五二 六角義実撰) などである。他に、二条良基撰といわれる『後撰百人一首』は、後人の偽撰とされている。

これらの中で、とくに『横川和尚百人一首』は、絶海中津・義堂周信・中巖円月・雪村周継ら、中世の禅僧百人の七言絶句を百首集めたもので、近世初期にいくつか編まれる「百人一詩」類の先蹤をなすものと考えてよいであろう。

では次に、近世における『百人一首』の出版状況を、時代を追いながら考察していくことにする。

二 近世初頭から万治年間まで

十七世紀に入ると、活字印刷が盛んになってくるのは周知の通りであるが、当初は後陽成天皇や後水尾天皇を中心とする、朝廷による出版、あるいは徳川家康の文化政策の一端としての、伏見版、駿河版などがよく知られている。この出版は、しだいに権力者側近の知識人、たとえば本阿弥光悦、角倉素庵らの、いわゆる嵯峨本という豪華本の出現にいたるのであるが、嵯峨本中の『伊勢物語』『源氏小鑑』『方丈記』『徒然草』『観世流謡本』などは、従来、特権階級のものであった古典文学を、庶民に解放していくのに大きな力があつたことはたしかである。

こうして書物は、しだいに一般化(といっても高価なものであつたが)していくのである。本格的出版業者として、もっとも早い人たちは、慶長十三年(一六〇八)に『五家正宗賛』を刊行した京都の中村

長兵衛や慶長十九年(一六一四)に『遍照發揮性靈集』を刊行した、同じく京都の中野市右衛門道判などであつた。

『百人一首』でいえば、竜門文庫蔵の慶長古活字版が古いものとしていられているが、寛永年間頃までの刊本はきわめて少なく、存在しているも刊年のしれるものはまれといった状態である。まだこの年代までの『百人一首』は、名跡として今日まで伝わる本文の筆写や、著名人の注釈がほとんどであり、中世以来の伝授物的意識がつよかつたといえるだろう。

こうした中で、寛永十五年(一六三八)、風月宗智刊『三部抄之抄』は注目すべき一書である。次に本書の書誌を、跡見短大図書館蔵本により記す。

| | |
|-----------|----------------|
| ・三部抄之抄 | 五卷合一冊 |
| タテ三七・七cm | ヨコ一九・〇cm |
| 丁数 | 詠歌大概卷一 二十丁 |
| 〃 | 卷二(秀歌躰大略) 三十六丁 |
| 小倉山荘色紙和歌抄 | |
| 上 | 号百人一首 二十五丁 |
| 下 | 二十二丁 |
| 未来記 | 二十丁 |
| 刊記 | 寛永十五戊寅年仲秋吉辰 |
| | 二条観音町 風月宗智刊行 |

本書は、二条派末流に尊重された、いわゆる伝授物の一つで、慶長三年（一六五〇）に後印本も版行され、かなりの流布をみた書物である。

万治年間頃までで見逃せないのは、漢学者によるいろいろな『百人一詩』の編纂である。これは、近世では野水軒黙鷗書、金井兵衛門開板の『百人一詩』が最初かと思われる。

以下、都立中央図書館加賀文庫蔵本により、書誌、内容について記すことにする。

・百人一詩 小本一冊 請求記号 11671

タテ一三・三 cm ヨコ九・四 cm 二十丁

刊記 慶安庚寅（三年）菊月吉日

野水軒黙鷗浸書 金井兵衛門開板之

内容は、先述の『横川和尚百人一首』を写し、版行したものであるが、書者の杜撰によるものか、順序がだいぶ異なっている。途中、作者不記のものがあったりもする。『横川和尚百人一首』では、第一番目に有名な「応制三山 絶海（中津）」の詩を置き、最後の十編の詩もすべて「応制〇〇」という形で揃えて、前後統一をはかっているにもかかわらず、本書はほぼ真中の「拏音 慕哲」の詩を最後にするなど、意図的とは思えぬ順序の乱れがある。

次に、林道春等の撰にかかる『百人一詩』について述べることにする。この書に関して江戸後期の書物奉行であり、北地探險家であった近藤守重（通称重蔵、号正齋）の著わした『右文故事』（十六巻 文化十四年成）に、次のような記事が載っている。

明暦元年（一六五五） 今春道春二命シテ中華歴代名臣三十六人ヲ撰テ賛ヲ作ラシメ又漢魏六朝唐宋百人一首ヲ撰集セシム（道春年譜）

万治元年（一六五八） 六月春齋二命シテ唐百人一首ヲ輯シム（鷲峯譜略）

寛永九年（一六六九） 九月十五日先年春齋撰上スル処ノ百人一首へ僧女ヲ加ヘラレムコト如何ト下問セラル春齋六人ヲ刪リ詩僧三人閨秀三人ヲ加ヘテ上ル（国史史館日録）

右の記事中の『漢魏六朝唐宋百人一首』とは、こんにち『百人一詩』として知られているものを指すが、跡見短大図書館蔵本によれば、次のような奥書がある。

右漢魏六朝唐宋百人一詩依内藤出雲守奉之而漢撰進之以献

御前且使画工勝田隱岐椽^{くわ}図百人像者也

明暦元年乙未六月中旬 道春 春齋 春徳

撰ばれた漢魏六朝詩は三十首、これは林道春（羅山）が撰進した。すなわち、漢高祖の「大風歌」、蘇武の「別李陵」などである。また、

唐詩は四十首、唐太宗の「秋白」、虞世南の「侍_レ宴_心_レ制」をはじめとして、李白、杜甫の詩がならぶ。これは春齋の撰するところである。つづく宋詩三十首は春徳が撰んだ。『右文故事』に記す寛文九年九月十五日の改編は、この書の一部を改めたことを指し、内閣文庫本によってそれを知ることができる。

万治元年には、『唐百人一詩』が編纂されている。内閣文庫本により、その書誌を次に記す。

・唐百人一詩 写一冊 請求記号207—27

題簽欠(書名墨書) 紺表紙

タテ二七・三cm ヨコ一九・〇cm 二十二丁

序なし

奥書

唐百人一首奉台命撰之永井伊賀守尚庸所傳旨也

明曆四年戊戌六月中旬 春齋向陽子 欽亭函三子

内容は、唐の太宗皇帝をはじめ、よくしられた唐の詩人百人の詩を集めたもので、とくにこれといった編纂上の特色は認められないが、先行書を意識していることはたしかである。

やや時代はくだるが、同じく内閣文庫蔵本に、「延宝丁巳(五年—一六七七)五月廿七日 鷲峰林叟」の奥書のある『唐宋百花一詩(写一冊 四十八丁)』なる一本がある。これは全詩数百六十二首(内訳—唐詩六十首、宋詩四十首、金詩三首、元詩三首、明詩三十二首、追加—から成

り、『百人一詩』とはいえないが、書名はあきらかにこれを意識したものであろうし、採用した詩のすべてが「花」を詠んでいるという、統一したテーマになっているのも珍しい。

このように、近世初期に幕府の学問の中枢にいる学者たちが、『百人一詩』を編纂したのは、朝廷中心の和歌の『百人一首』を頭においてのことだったのではなからうか。

万治三年(一六六〇)には、刊年や成立のしれるものだけでも次の諸書がある。

・百人一句 重以編(『阿誰軒誹諧書目録』による)

・^{万宝}百人一首大成(万治三年庚子仲夏 寺町 山田三郎兵衛板行 跡見短

大図書館蔵)

・百人一首抄 松永貞徳(『大日本歌書綜覧』による。刊年疑問)

・武家百人一首 写本 跋文 万治庚子(一六六〇) 仲秋

右の中で『^{万治}百人一首大成』は、万治三年の刊記のほかに「承応二年(一六五三)十一月日」の日付のある跋文をもつが、管見によると、歌仙絵入りの『百人一首』としては、もつとも古いものと考えられる。各丁にひとりずつの歌人をあて、本文と歌仙絵、上欄に歌の説明という形式で、後世にはごく普通にみられる形のものである。

さらに万治年間刊としては、『犬百人一首』『蔵笥百首』等がある。これらの中で異色のものは、やはり『犬百人一首』であろう。奥書には「幽双庵 寛文九己酉歳中夏上旬」とあるが、『国書総目録』には「万

治頃刊？」とある。また『稀書解説』によると

(前略) 奥書の「寛文九己酉歲」と「中夏上旬」の四文字とは書体を異にせるが如し。林若樹氏の説には前六文字は後に入木したにあらざる歟 図中の風俗より推すも寛文以前の開板と思はるると謂たり。

とあり、刊行は万治年間までさかのぼらせてよいのかもしれない。作者の幽双庵の経歴等は不明であるが、かなり古典に通じ、作歌の技術を心得た人物であつたらうと思われる。『小倉百人一首』のもじりとしては最初のものであり、『伊勢物語』をもじつた『仁勢物語』などと同類のものである。またその書名は、当時、『犬○○』などと、「犬」を冠した作品は、『犬筑波』は別格として、『犬枕』(慶長初年へ一五九六年頃)、『犬徒然』(慶長五年へ一六一九)などがあり、狂言にも『犬山伏』などがみられるので、そうしたものの影響を受けておそらく命名したものであろう。

『蔵笥百首』も万治年間の版をみることができ。他に、延宝六年(一六七八)版、享保六年(一七二二)版がある。本書は三巻六冊より成り、藤井懶斎の編著にかかる。「百首」とあるが、『百人一首』から「教訓のたすけ」となるもの十二首を撰び、これに道徳的解釈を加えたものであり、形式上は『百人一首』となっている。自序によれば、自分の娘の教育のために編纂したもので、一種の女訓書と考えることもでき、『百人一首』を教訓的意味に用いた最初のものである。

三 寛文より延宝まで

寛文元年(一六六二)には、後水尾天皇の百人一首の御講義を、公卿等が筆録したものが多くみられる。いずれも写本で伝わったものであるが、次のようなものである。

- ・百人一首抄 後水尾院御勅講 三条実澄筆録
- ・百人一首聞書 後水尾院述 智仁親王記
- ・百人一首口訣 後水尾院御勅講
- ・百人一首御講尺聞書 後水尾天皇 飛鳥井雅章記
- ・百人一首後水尾御講尺聞書 後水尾天皇述 耕書堂主人筆
- ・百人一首注(別―百人一首聞書) 後水尾天皇述 道晃親王記
- ・百人一首御講釈

皇室における百人一首の研究については、田中宗作氏⁽⁴⁾の研究に詳述されているが、とくに、百八代後水尾天皇は古典研究に熱心であった。寛文元年五月六日、宮中において『百人一首』をご講釈になり、その際の聞書が多く流布したようである。しかし、後水尾天皇は文事一辺倒の天皇ではなく、紫衣事件などをきっかけにして、寛永六年(一六二九)、幕府の承認なく突如して讓位を決定され、幕府もいたしかたなくこれを追認するという、異例の措置を行ったということからも、かなり強烈な個性のもち主であつたと考えられる。

わが国では、古くから出版書籍目録が刊行されているが、近世にお

いてはなおさら頻繁にその刊行をみる事ができる。寛文六年頃刊とされる『和漢書籍目録』（二条通玉屋町 村上平楽寺開板）をみると、「百人一首類」として、次のような書物が掲載されている。

- 一冊 百人一首
 - 一冊 同小本
 - 三冊 同抄
 - 五冊 同五刊抄
 - 二冊 同頭図
 - 二冊 新百人一首
 - 五冊 三部之抄
 - 八冊 七部之抄
- また、寛文十年刊『増補書籍目録作者付』（江戸本町三丁目 西村又右衛門 京寺町誓願寺前 西村又左衛門）によると次の通りである。
- 一冊 百人一首 大本 中本 小本
 - 尊圓 式部卿 傳内^{ママ?} 光悦
 - 三冊 同抄
 - 五冊 同五部抄
 - 二冊 同頭書 浅井松雲作
 - 二冊 同頭図 歌ノ心ヲ絵ニ記ス
 - 三冊 同貞徳抄
 - 二冊 新百人一首
 - 二冊 武者百人一首 常徳院撰

右の中で『百人一首頭図』とは、いったいどのようなものであろうか。「歌の心を絵に記す」とは、絵解きのたぐいなのだろうか。なお、寛文十一年刊『新板増補書籍目録』には、同書に「光利図」と注記がふえている。さらに後年のものには「光俊」ともある。

寛文末年から延宝初年（一六七〇—一六七五頃）にかけて注目すべき現象は、『百人一首』の絵入り版本の続いての出現である。たとえば『百人一首基箭抄』（寛文十三年刊）、『百人一首像讚抄』（延宝六年刊）等であるが、それぞれの内容等については、すでに先学の諸見解があるのでここではとくに触れないこととする。

四 天和より貞享まで

天和二年（一六八二）正月十一日、土橋春林序の『俳諧百人一句難波色紙』が、大阪深江屋太郎兵衛から刊行された。これには、井原西鶴自筆自画の大阪の俳諧師九十八人の画像と、発句がおさめられている。春林は西山宗因に連歌、俳諧を学んだ人物で、その序の中でこの津はつけあひも早船のより所、作者数を覚す。この百人はおぼえて、そのかたちをしるし、一句をとめて南窓の袖壁に残されしを、この春なくさみに是を開板する物ならしと述べている。つまり、西鶴庵の南の窓の袖壁に貼ってあった西鶴自筆自画の色紙や、大阪の俳人たちの肖像と発句をもらいうけて、板行したというのである。巻頭に、宗因のはるかなる唐茶も秋のね覚かな

の発句と肖像をおき、巻軸には西鶴の

烏賊の甲や我が色滴す雪の鷺

の発句と肖像が配されている。

『百人一首』版行の歴史からみると、俳書としては『百人一句』

(重以編 寛文七年(一六六六)自跋)、『新百人一句』(重以編 寛文十一年(一六七二))に続くもので、漢詩をあつめた『百人一詩』に続き、俳諧の世界でも、百人の句を集めて一書を成すというスタイルが確立されてきたことを示している。この後、次第に多種多様の『百人一句』が刊行されるようになっていくのである。

天和元年に日本橋南一丁目左内町山田喜兵衛開板による書籍目録『新撰書籍目録大全^(直段付太意)』が刊行されている。書物の値段が付されたのは、本目録が最初であるが、この中にも『百人一首』類がいくつかみられ、値段を知ることができる。次にそれを掲げてみる。

| | | | |
|----|------|------|------|
| 一冊 | 百人一首 | 定家撰 | 老奴 |
| 一冊 | 同尊圓 | | 老奴二分 |
| 一冊 | 同式部卿 | | 老奴五分 |
| 二冊 | 同女筆 | | 三奴 |
| 一冊 | 同小本 | | 五分 |
| 二冊 | 同顕図 | | 三奴七分 |
| 一冊 | 同文十抄 | 石崎氏 | 老奴五分 |
| 二冊 | 同頭書 | 浅井松雲 | 二奴 |
| 三冊 | 同抄 | 細川玄旨 | 二奴五分 |

三冊 同首書抄 貞徳

四奴五分

同五巻抄

五奴

三冊 百人一首さうさん抄

江戸物老奴五分

二冊 俳諧百人一句

二奴

八冊 和歌七部抄

七奴五分

五冊 同三部抄

五奴

二冊 武家百人一首

二奴

二冊 新百人一首

二奴

等である。同目録で他の書物の値段を検すると、次のように記してある。

十冊 俳諧御傘 貞徳

八奴

三冊 女郎花物語 北村季吟

四奴

十三冊 おとぎばふこ 浅井松雲

十五奴

七冊 江戸名所記 松雲作

七奴

ちなみに、元禄九年(一六九六)刊『増益書籍目録大全』(河内屋喜兵衛刊)において、秋田屋版の『好色一代男』の値段は、八冊で五奴であった。

なお、天和年間には、菱河師宣による『百人女郎』⁽⁵⁾が刊行され、また『絵本年表六』⁽⁶⁾に『百人一首姿 三 貞享二(一六八五) 師宣』とあるが、いずれも未見である。

貞享二年刊行の『広益書籍目録』(西村市良右衛門等版)に、「二冊 女

百人一首」の記載をみる事ができるが、この書は『諸国名所女百人一首』（東京国立博物館蔵）を指すのであろうか。ただし、本書の後書きには「貞享三年」とあり、貞享二年版の『女百人一首』は他にも見出すことはできない。

次に、この貞享三年版『諸国名所女百人一首』についておいておくことにする。本書の書詩等は次の通りである。

・諸国名所女百人一首 横一冊 請求番号 と 6826

タテ一五・一cm ヨコ二〇・八cm

後書

此外都近辺名所和歌百人一首亦諸国名所百人一首各名所歌読人賛右三通を歌かるたに作りおさなき御方にも御合取遊能様にかかるたの裏に十種の草木の花絵をかき則一首の歌の姿になし是にて上下の句之裏の絵もあひあふやかかるた壺面毎に合せやう具に書かき有之

京蛸薬師通堺町

平野屋判本

貞享三年寅九月吉日 喜平

内容は、一丁を三人とし、本文、さしえ（姿絵）、頭書等となってゐる。たとえば一丁オには、

山城 賀茂 撰子内親王

紀伊 名草浜 式子内親王

山城 松尾 祐子内親王家紀伊

といったぐあいに、各歌人がその国や土地を詠んだ和歌を掲載している。

ところが、同じ貞享三年九月板行の『女性百人一首』（題簽なし〔仮題〕 跡見短大図書館蔵）では、歌人、後書はほぼ同じであるが、絵柄は大分異なっている。

また、大阪市大森文庫に『倭名所百人一首』なる一本がある。本書は、男女の歌人百人を全面の名所に配し、その歌を載せたもので、各丁三人、本文、さしえの形は前二書と同じで、後書に記すところも同じである。採用歌人は大分異なり、一丁オは、

山城 清水 後嵯峨院

大和 春日山 □ 卿資宣（日野資宣 正応⁵（一二九二）没）

大和 □ □ 右近衛中将経平（近衛経平 文保²（一二三二）没）

三人の和歌を配し、以下同じように続く。

さらに、内閣文庫に『名所和歌百人一首』という一本を蔵するが、この書は、いま述べてきた各書がもつ後書きを前書きとしてもっている。次に本書の書誌を簡単に記す。

・名所和歌百人一首 一冊 請求番号201-414

紺表紙 タテ二五・八cm ヨコ一九・一cm

丁数 前書一丁ウ 本文五十丁 刊記一丁

この刊記から判断するに、〈喜平〉は版木師なのではあるまいか。そして、平野屋喜右衛門が書肆であろう。『書賈集覧』『近世書林板元総覧』等に、「平野屋喜平 京蛸薬師通堺町」とあるのは、誤まって二人を一人の人物として表記したものであろう。

内容は、一丁に一人ずつ配し、本文とさし絵を描いている。『倭名所百人一首』とは人物に多少の出入り、順序等が異なっている。また『日本歌学大系 別巻六』にも『名所百人一首』が翻刻され、「以貞享三年板本書写、訂正仮名遣誤等畢、昭和五十九年四月」とあるが、これは先に述べたいずれともちがうものである。まだ別の『名所百人一首』が存在していたのであろうか。いずれにしても、これら「名所百人一首」の前後関係については、なお後考をまちたい。

こうした「名所和歌」は、いうまでもなく『万葉集』以来数多く詠まれ、建保三年（一二二五）には『内裏名所百首』といった「名所題百首」が現われており、近世初頭刊行のものが「名所百首」の形として最初のものではないが、それを「——百人一首」という呼称にしたのは、近世が最初であった。また、近世初頭には、平和の到来とともに数多くの名所記や旅行記が編まれ、人々の旅心をそそったりもしているのので、「名所」を詠んだ和歌を集めて成った『百人一首』は、そ

うした人々の心をあてこんだ著作であったものかとも思われ、かならずしも和歌の伝統の「名所和歌」を、直ちに引くものではないのかもしれない。

以上、近世初期の『百人一首』の出版状況と、その特徴を追ってみてきた。この約八十年余りの間にもその様相はかなり変化してきており、はじめは本文の筆写が中心であったものが、やがて詳しい注釈がほどこされるようになり、さらに本文のもじりが出現し、漢詩、俳諧にまでその分野をひろげるようになった。このことは、近世はじめに『源氏物語』『伊勢物語』『徒然草』といった古典類が、印刷術の普及に伴って流布して行ったのと期を一にする現象でもあるが、有名古典の中でも、これほど形を変えて出版されたものは、他に類をみないところである。

このように、あらゆる人々に親しまれた『百人一首』は、元禄以降、さらに多彩な形をとって出版されて行くようになるのである（続く）。

- 注(1) 『大日本歌書綜覧』 福井久蔵 昭2 不二書房
(2) 『江戸書籍商史』 上里春生 名著刊行会 昭44
(3) 『江戸の本屋さん』 今田洋二 NHKブックス 昭52
(4) 『百人一首古注釈の研究』 田中宗作 桜楓社 昭41
(5) 『絵本の研究』 仲田勝之助 昭25
(6) 日本書誌学大系34 青裳堂書店 昭58
(7) 後書の冒頭「此外部近辺名所和歌百人一首亦女性百人一首各名所歌読人替右三通を云々」とあり、大阪市大森文庫本も同様である。